

たんぽぽ

「たんぽぽや いくたび踏まれて きょうの花」



八南小学校 校長室だより

令和6年 4月25日(木)

子どもの主体性を育てるために

子どもたちが将来、自分の力で生きていけるように、主体性を育てたいという思いは、保護者の方も私たち教師も同じだと思います。では、主体性を育てていくために、子どもとの接し方・関わり方で、大人はどんなことに気を付けていけばいいのでしょうか。人それぞれ考えはあると思いますが、私は次の3つのことが大事だと思っています。その3つとは「①子どもに任せること」「②子どもに自己決定・自己選択させること」「③目標や見通しをもたせること」です。

まず1つ目の「子どもに任せること」についてです。子どもに任せるのは、簡単なようですごく難しいことと思います。うまくいきそうならよいのですが、大人は先が読めてしまうので、今のままだと失敗して子どもが傷ついてしまうと思うと、心配になって、結果も出てないうちからつい口を出したり、手を出したりしてしまいます。大人の言う通り、もしくは大人が代わりにやってあげて、子どもに力がつくのでしょうか。自分の力でやり遂げて、うまくいったら大きな自信になるし、たとえうまくいかなかったとしても、「次はこうしてみよう」と自分なりに考えながら取り組んで、少しずつできるようになっていくのだと思います。とにかく子どもに任せてみて、大人は我慢して「待つ」「見守る」姿勢が大事ではないかと思っています。

2つ目の「子どもに自己決定・自己選択させること」についてです。子どもが期待通りの動きを見せない場合、大人はつい「ああしなさい」「こうしなさい」と指示を出してしまいます。また子どもが困っている場合、まだ望んでもいないにもかかわらず「こうしてみたら」と先に解決の仕方を示したりしてしまいます。でも、考えてみてください。小さい頃から、自分で考えたり、判断したりする経験を積み重ねていくと、だんだん、人を頼りにしなくても、自分で考え、判断して行動できるようになっていくと思います。いつもまでも子どもが宿題をやらないとき、「早くやりなさい」ではなく、「今、何をしておくといいと思う」「何時になったら始められそうかな」など、声かけの仕方を工夫してみたいかがでしょうか。また子どもが友達とケンカをしてしまったとき、その友達と仲直りするために、まずは「どうしたらいいと思う」「どんなことならできそう」と問いかけて、子どもが自ら判断して、自分の力で答えが導き出せるようにしたいものです。ただ、子どもがどうしたらよいかわからない時もありますので、その場合は、選択肢を与えたり、「自分ならこうするよ」と方向性を示したりしてあげられるとよいと思います。こうした問いかけで、子どもに自己決定させていくには時間がかかりますが、自分で決めたことだけに、自分の責任で納得しながら行動に移せると思います。人から言われて仕方なくやったことは、うまくいかなかったとき、人のせいにしてしまいます。無理やりやらせても子どものためにはならないと思います。

3つ目の「目標や見通しをもたせること」についてです。子どもに限らず人は「できるようになりたい」「わかるようになりたい」と成長の欲求があると思います。人がよりよく成長するためには、やはり「こうになりたい」というはっきりとした目標があること、そして、その目標に近づくために、「何をしていけばよいのか」「何ならできそうか」と具体的な計画があることだと思います。時間があるときに、子どもと「どうになりたい」「そのためにどんなことができそう」「どんな計画でやっていこうか」と話し合ってみてはいかがでしょうか。勉強のこと、習い事のこと、将来のこと、どれでもよいかと思えます。目標や見通しをもつことで、子どもは自分のやることに価値や意味を見出して、前向きな気持ちで取り組めるようになると思います。

子どもは、大人が思う以上に、自分で考える力が備わっています。心配して口や手を出したくなる気持ちはよくわかりますが、子どもを信頼し、子どもの考えや判断を大切にして、見守っていくことも必要なのではないかと思います。

学校でも、子どもの主体性を育むような接し方・関わり方を大切にしていきたいと思っています。